



「今、超克のとき。山姥切国広いざ、足利。」
まんばモンペによる予習資料

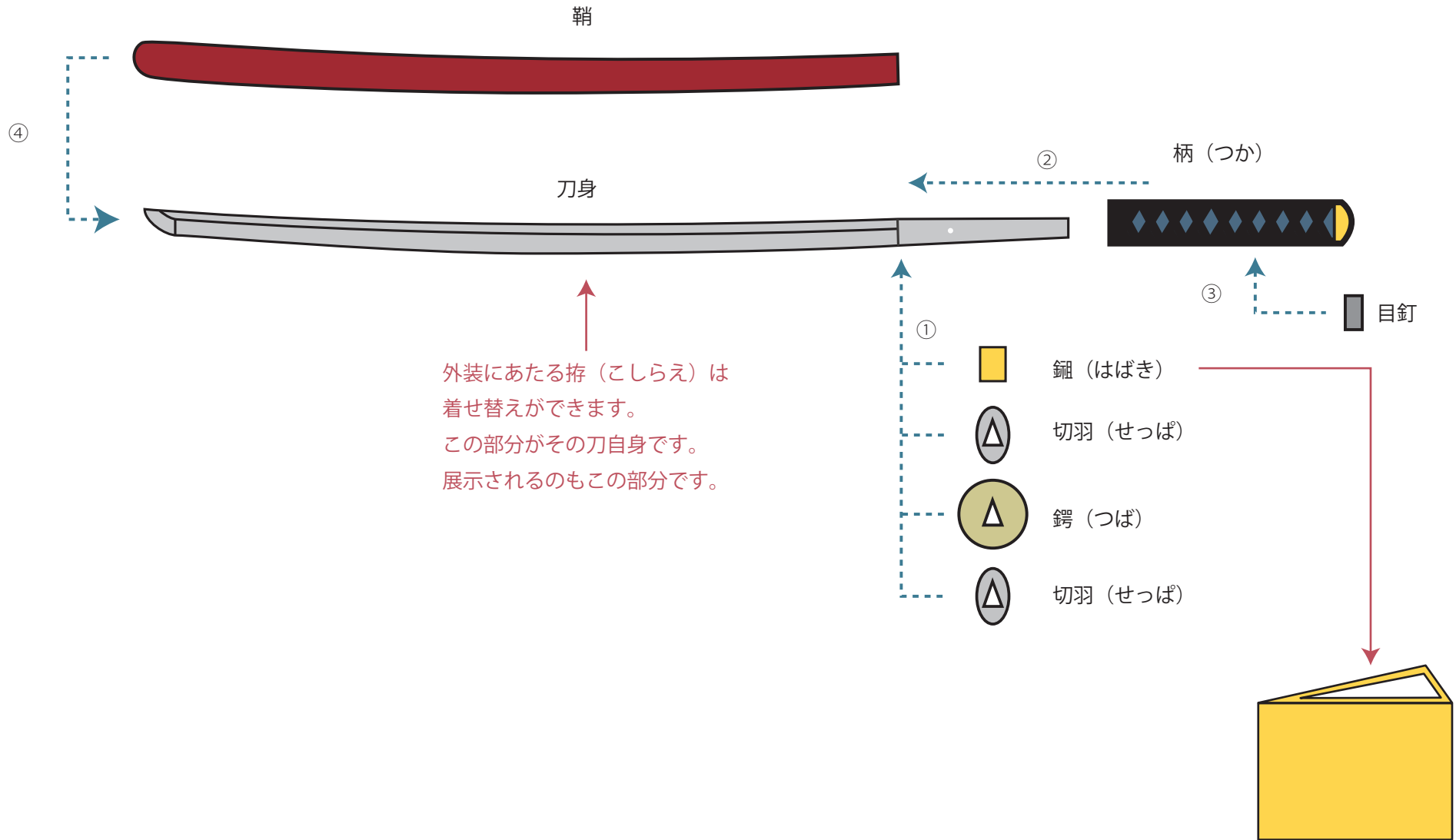
2017.2.24

刀録管理人、備中国審神者・みき

取扱注意事項

- この資料は、なるべくご自宅か会場までの移動中に読んでください。
- 会場では、ロビー・ミュージアムカフェ以外の場所で読まないでください。
- 足利市・主催者にはこの資料に関する問い合わせをしないでください。
あくまで有志による資料です。
- 足利市サイトに掲載の注意事項「メモなどは鉛筆で」を守り、館内でのメモは鉛筆で行いましょう。
- 誤字脱字の報告及び問い合わせは Twitter @miki7500 までお願いします。

1. 打刀の構造



日本刀の組み立て手順を簡単に図にしました。

この図では、実際に持ち歩くための拵に刀身をセットしていますが、

長期間保管する時は白木の鞘・柄の外装にセットします。

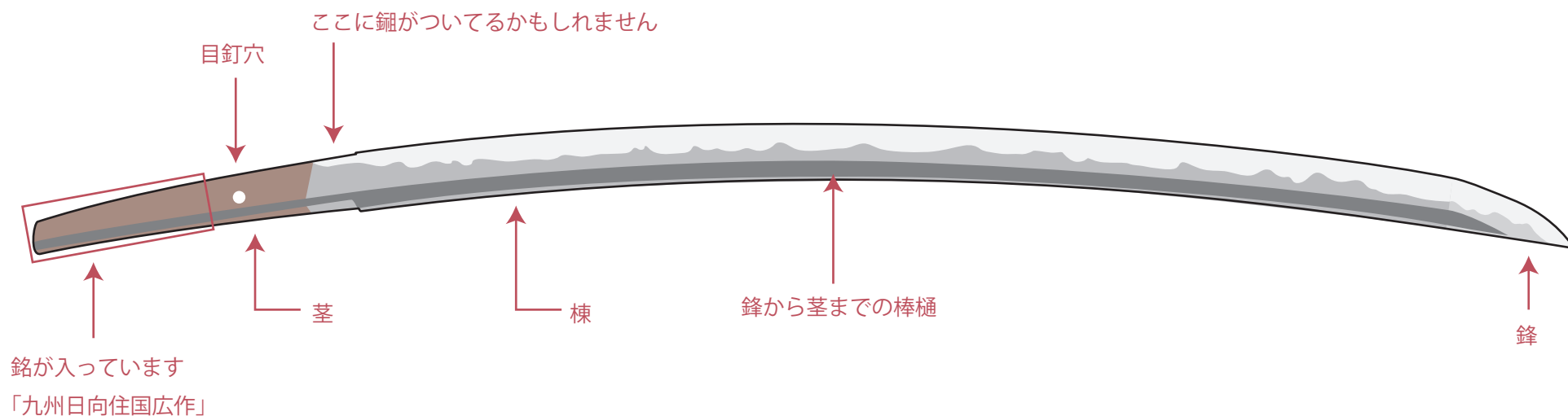
この白木の鞘・柄の外装のことを「白鞘」と呼びます。

「はばき」をざっくり書くとこんな形です。穴に刀身を通します。横の面に様々な装飾(紋など)を施してあります。

2. 展示フォーメーションと外見の特徴

銘 九州日向住国広作 天正十八年庚寅式月吉日 平頭長号「山姥切」

図：小学館 原色日本の美術 25 に掲載の写真から書き起こし



銘（めい）

刀の作者が入れるサインのようなものです。作られた日付や注文主、作られた経緯などが刻まれます。銘を入れる動作は「銘を切る」と言います。

目釘穴（めくぎあな）

刀身を柄に固定するための「目釘」を通すための穴です。拵が変更されるとサイズ調整のために新しいものが空けられることがあります。

茎（なかご）

刀身が柄に差し込まれる部分です。作られた当時の姿を保っているものは「生ぶ（うぶ）」と呼ばれます。時代や刀派によって末端・茎尻（なかごじり）の形が異なります。この刀は「栗尻」という形です。

鋒（きっさき）

刀身の先端です。この部分が折れたり欠けたりすると、その刀は使い物になりません。刀の命とも言える部分です。

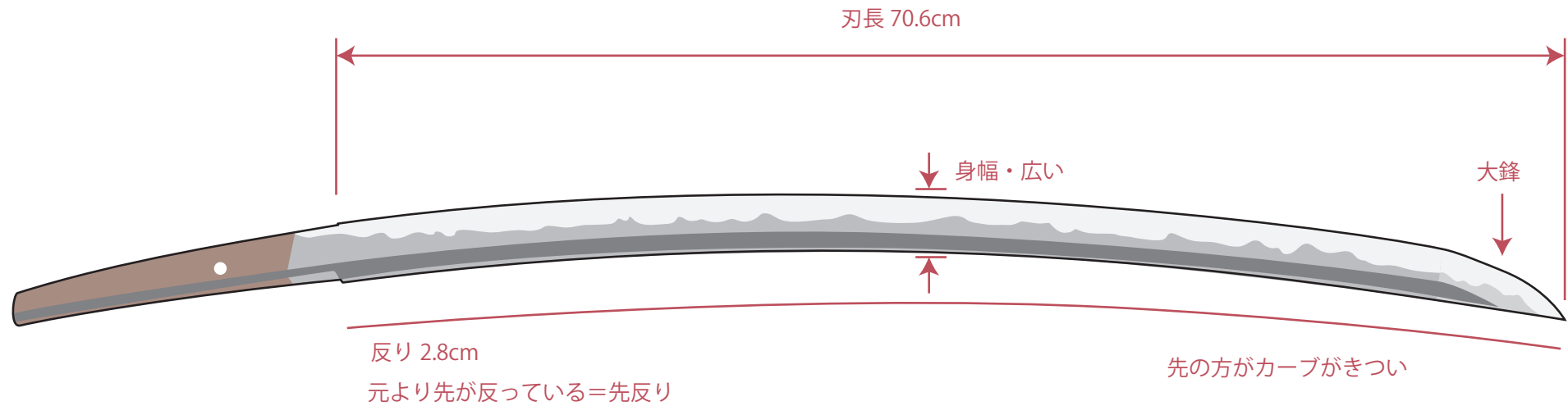
棒樋（ぼうひ）

樋は刀身に入れられる溝のこと、棒樋は真っ直ぐで装飾のないものを言います。茎の末端まで樋が入っていることを「搔き通し」と言います。

棟（むね）

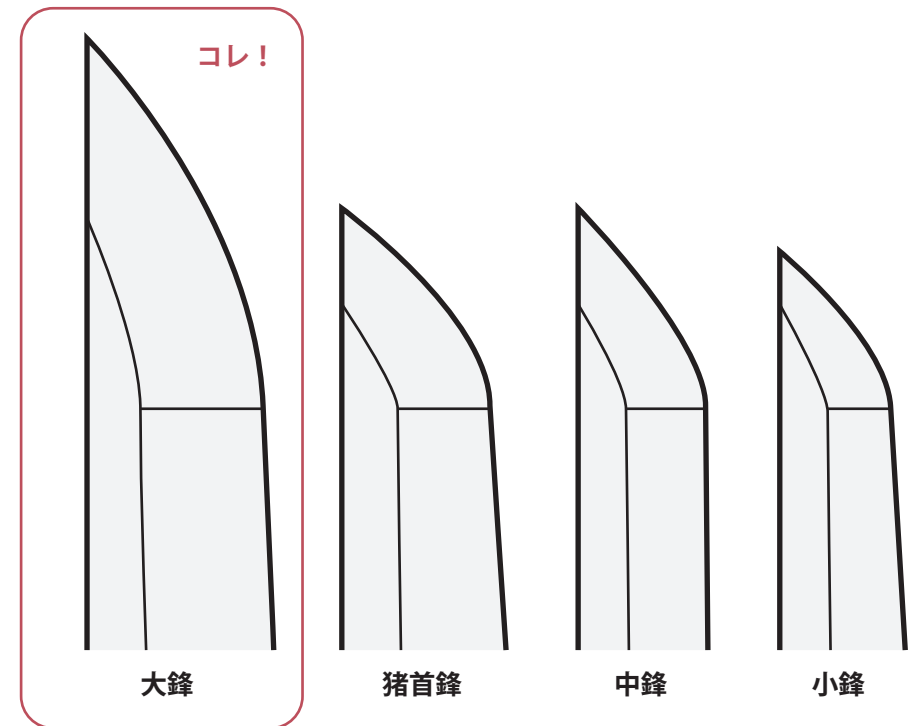
いわゆる「みね」と呼ぶこともある、刀身の背中に当たる部分です。山姥切国広はてっぺんが三角になった「庵棟（いおりむね）」です。

3. 外形・姿の鑑賞



作られたのは天正年間ですが、全体のスタイルは典型的な「慶長新刀」の形です。大鋒+幅広な身幅+先反り。刃の根元から鋒近くまで幅広なままぐーっと反っている力強い形です。

慶長新刀のスタイルはこの頃流行した、南北朝時代の太刀を根元から短く「磨り上げ」して打刀にした形です。本歌である本作長義（徳川美術館蔵・名古屋市）はまさに「南北朝時代の太刀を磨り上げて打刀にしたもの」です。そうした意味でも山姥切国広はこの時代を代表する刀だと言えます。



4. 表面のテクスチャ・地鉄の鑑賞

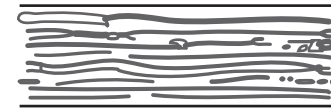
肌の違いは鉄を「折り返し鍛錬」する時の折る方向の違いから生まれます。



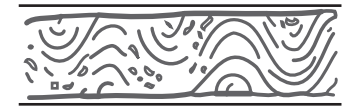
コレ!



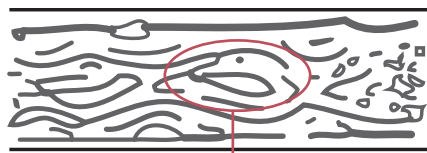
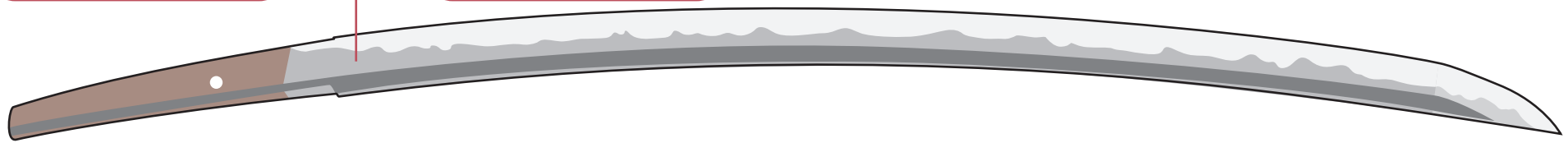
ところどころコレ



柾目肌 (まさめはだ)



綾杉肌 (あやすぎはだ)



こういう模様が細長く伸びて線のようになるのを「流れる」と言います。

「板目、杓交じり総体に流れどころに肌立ち、ざんぐりとして地景交じり、地沸よくつく」が地鉄に関する鑑賞文（つるぎの屋サイトより）です。板目肌をベースに杓目肌の部分があることが分かります。

「流れる」とは、板目の一部が細長く横に伸びてその部分だけ柾目肌のようになることです。

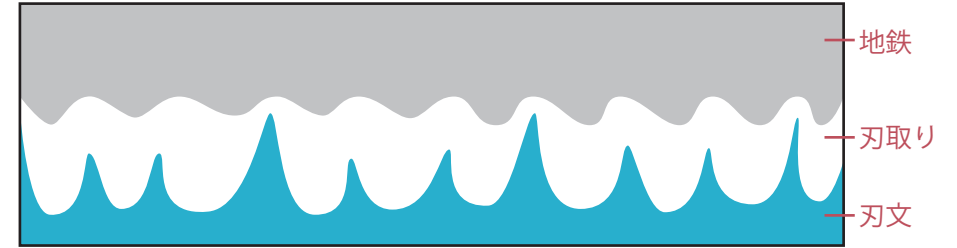
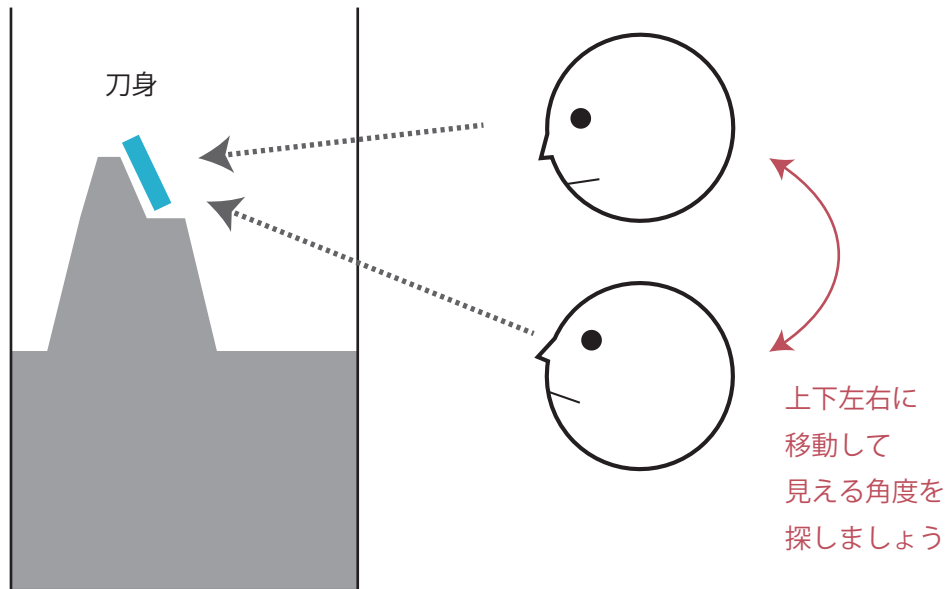
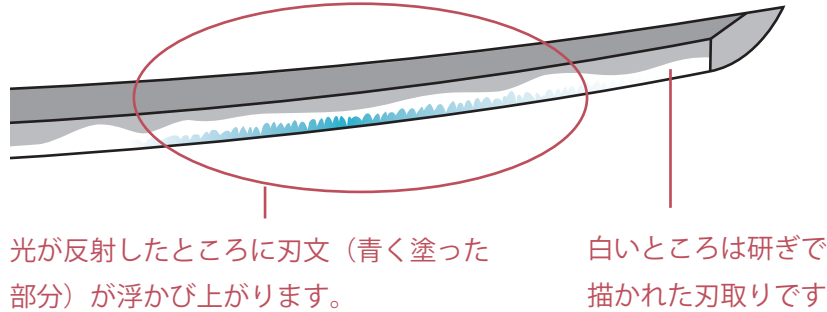
「ざんぐり」は人によって表現に違いがあり、コレ！という定義はないのですが、何振りかざんぐりしている刀を拝見した経験から「板目の線などに反射した光に透明感があり、水晶のようにキラキラと見える」ことかな…と思います。地景は、そこだけ深い色になった筋のこと、地沸は地鉄の中に銀の砂を蒔いたようなキラキラした粒のこと。深い色になったところと、キラキラした粒のあるところが入り混じっている、奥深いテクスチャを持っているはずですので、実物で確認してみてください。

板目肌は正宗が大成した「相州伝（そうしゅうでん）」によく見られる地鉄です。それに対して、杓目肌は長船派など「備前伝（びぜんでん）」に見られる地鉄です。

山姥切国広の本歌「本作長義」は備前の長義の作ですが、長義は相州伝を取り入れた「相伝備前（そうでんびぜん）」一派の刀工です。そのため「小板目に杓まじり」という地鉄です。備前製の刀は材料のせいか、地鉄が落ち着いた黒っぽい光を反射します。相州伝寄りの作刀をしていても、本作長義は重厚な黒っぽい光、山姥切国広は透明感のある光、と差があると思われます。本作長義を見たことのある方は印象の違いにも注目してください。

5. 刃文の鑑賞の前に…刃文の見方

現在、日本刀の多くは刀身をより美しく見せるための「化粧研ぎ」が施されています。刀匠が作った刃文とは違ったラインを白く目立たせ、光が反射した時に刃文が現れる見せ方をすることもあります。

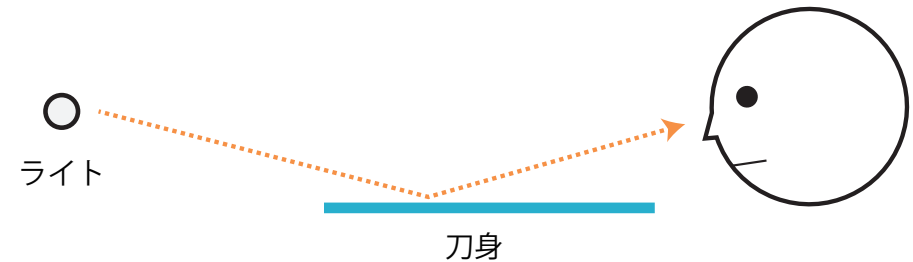


例えば孫六兼元

歌仙兼定の作者・二代兼定と同時代で親しかったと言われる、二代兼元のトレードマークとも言える刃文「三本杉」はトゲトゲです。この表情を和らげるため、化粧研ぎでは刃取りを丸い曲線で描いて「互の目」風に仕上げている場合があります。

手で刀身を持って刃文を見る場合

日本刀鑑賞ワークショップなど刀身を持つ場合は、ライトの光がきれいにあたるよう角度を調節することができます。



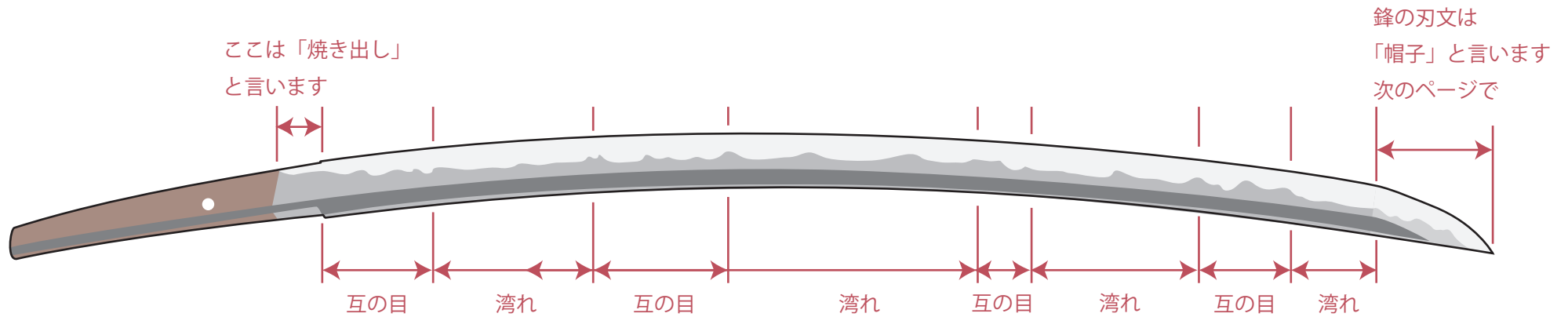
展示で刃文を見る場合

展示では刀身の角度が変えられませんので、自分が上下左右に動いて刃文がきれに見える角度を探してください。なお長時間にわたって展示物の正面を占拠すると他の方が見られません。よく分からなくてリベンジしたい場合は、もう一度列に並びましょう。

6. 刃文の鑑賞その1・刃文のメインパターン

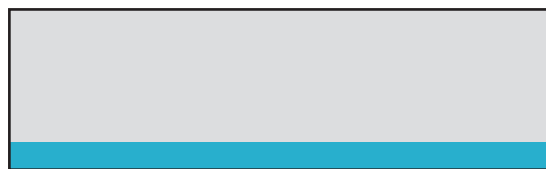
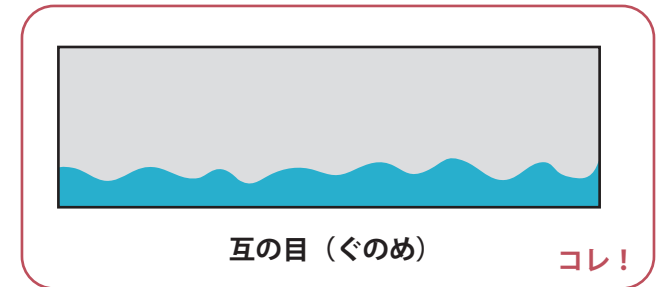
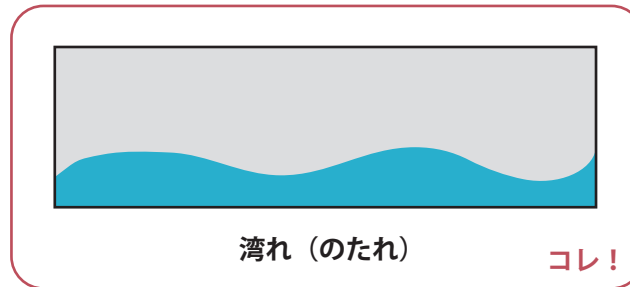
「湾れ主調で互の目交じり」これが刃文のメインの部分についての鑑賞文です。

前のページにも書きましたが、刃文は光を反射させなくては見えません。そのため、写真を元にして書いたこの刀の図にも刃文は書いていません。

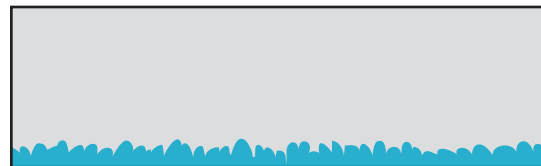


※刃取りの形から、刃文のパターンを推測してみました。合っているかどうか実物を見て確認してみてください。

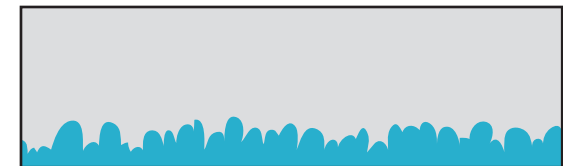
刃文の様子の種類は派生系なども含めるとたくさんありますが、基本の5パターンがこちらに示したものです。



直刃 (すぐは)



小乱れ (こみだれ)



丁子 (ちょうじ)

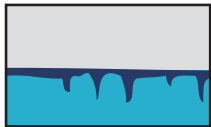
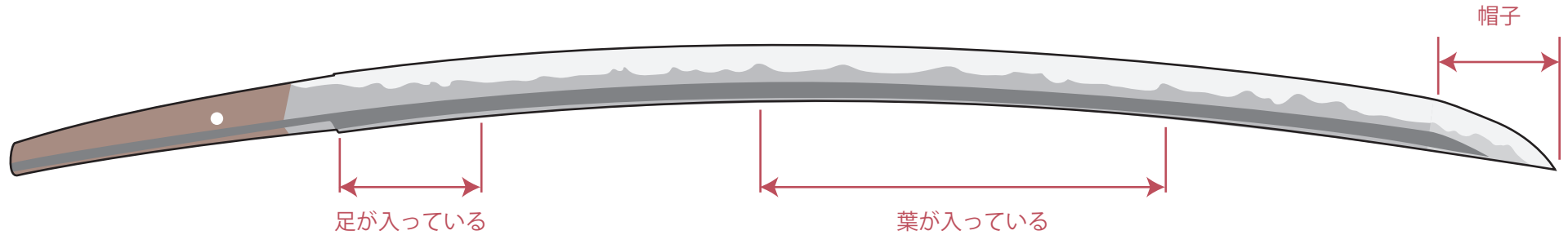
7. 刃文の鑑賞その2・刃中の働きと帽子

「足・葉が盛んに入り」これが刃文の中に見られる働きについての鑑賞文です。これも写真にははっきり写っていませんので、おそらくこのあたりであろうという推測を書きますので、実際に見て確認してください。

「働き」には、他に「金筋（きんすじ）」や「稲妻」「ほつれ」「食い違い刃」「二重刃」「砂流し（すながし）」「うちのけ」などがあります。

「帽子は乱れ込んで先掃きかけて返る」これが帽子の鑑賞文です。

帽子にもいくつか種類があります。山姥切国広の場合は「乱れ込み」という基本パターンに、「掃きかけ」という要素がプラスされています。掃きかけはハケで掃いたような細かい線が何重にも走る様子です。帽子の先の「返り」のカーブ部分が細い何重もの線になっているということです。



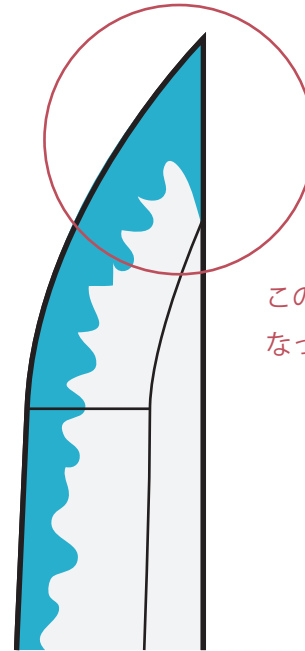
足

刃文の縁から、細い筋のような線が刃側に向かって伸びているものを言います。短いものは「小足」と言います。



葉（よう）

色の違うカケラのような部分が刃文の中に浮かんでいるものをいいます。足が途中でちぎれているような形です。



この部分が「掃きかけ」になっていると思われます。

乱れ込み

8. 刀工・堀川国広について

堀川国広の生涯については他の刀工と同じように、詳しく分かっていません。年齢のある作品やわずかな史料から足取りがつかめる程度です。もっとも古い年齢のある作品から、亡くなるまでの年表を見てみましょう。

西暦	年号	満年齢	行動	歴史上のできごと
1576	天正 4	45	最も古い年紀作を作る	
1577	天正 5	46	年紀作あり、主家・伊東家が没落	
1578	天正 6	47	年紀作なし	上杉謙信没
1579	天正 7	48	年紀作なし	
1580	天正 8	49	年紀作なし	
1581	天正 9	50	年紀作なし	
1582	天正 10	51	年紀作なし	本能寺の変、山崎の戦い
1583	天正 11	52	年紀作なし	
1584	天正 12	53	山伏国広を作る	小牧長久手の戦い
1585	天正 13	54	年紀作なし	
1586	天正 14	55	年紀作あり	豊臣秀吉関白就任
1587	天正 15	56	年紀作あり 伊東祐兵により伊東家再興	豊臣秀吉、九州征伐
1588	天正 16	57	年紀作あり	刀狩令
1589	天正 17	58	九州から関東へ、岐阜の陸奥守大道と合作	
1590	天正 18	59	山姥切国広、布袋国広を足利で作る	豊臣秀吉、北条征伐
1591	天正 19	60	年紀作あり	豊臣秀次関白就任
1592	文禄元	61	年紀作なし	第一次朝鮮出兵
1593	文禄 2	62	年紀作なし	豊臣秀頼誕生
1594	文禄 3	63	年紀作なし	豊臣秀次没
1595	文禄 4	64	年紀作なし	

西暦	年号	満年齢	行動	歴史上のできごと
1596	慶長元	65	年紀作なし	
1597	慶長 2	66	年紀作なし	第二次朝鮮出兵
1598	慶長 3	67	年紀作なし	豊臣秀吉没
1599	慶長 4	68	年紀作あり 京都・堀川一条に定住	
1600	慶長 5	69	年紀作なし	関ヶ原の戦い
1601	慶長 6	70	年紀作なし	
1602	慶長 7	71	年紀作あり	
1603	慶長 8	72	年紀作あり	江戸幕府創立
1604	慶長 9	73	年紀作あり	
1605	慶長 10	74	年紀作あり	徳川秀忠征夷大將軍就任
1606	慶長 11	75	年紀作あり	
1607	慶長 12	76	年紀作あり	
1608	慶長 13	77	年紀作あり	
1609	慶長 14	78	年紀作あり	
1610	慶長 15	79	年紀作あり	
1611	慶長 16	80	年紀作あり	
1612	慶長 17	81	年紀作あり	
1613	慶長 18	82	年紀作あり	
1614	慶長 19	83	国広没	大坂冬の陣

「石田三成の命令で正宗の贋作作りをした」「朝鮮出兵に同行した」など、史実として確認できない噂・逸話は省いています。

国広の家系は伊東家に文人として仕えていたと言われ、国広も銘に使われている漢字・熟語から学者並の教養を身につけていたと指摘されており、足利学校へ招かれたのも彼が持っていた専門知識が必要とされたのではないかとされています。山姥切国広を作り、京都にも影響力のあった足利学校から中央政権のVIPへの足がかりを得た国広は一度伊東家へ戻ったあと、京都で「刀匠・堀川国広」として本格的に活動します。山姥切国広は「堀川派」が起こるきっかけになった刀でもあります。

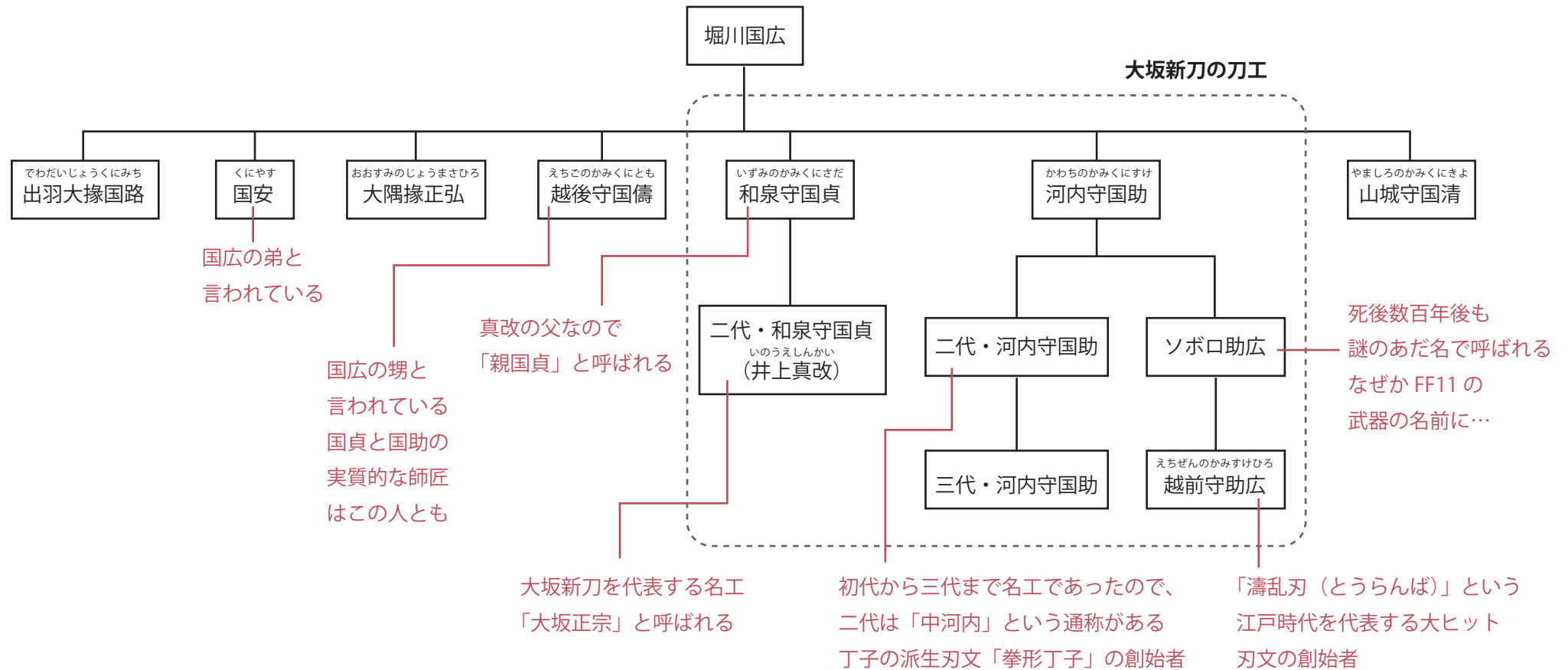
9. 堀川派の刀工たち

堀川国広は多くの名工を育てた「堀川派の祖」でもあります。

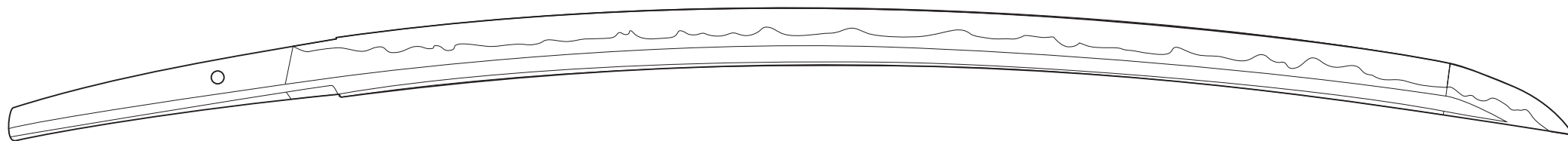
大坂に移住した国貞・国助の一派も名工を排出し、江戸の長曾祢興里（虎徹）と同世代に当たる井上真改らの頃には「東の虎徹、西の堀川」と呼ばれるようになります。

下の系図は堀川派のうち、著名な刀工です。

おそらく晩年の国広銘の作品のいくつかは弟子による代打ち（途中まで弟子が作り師匠が仕上げる）であろうと推察されます。



展示を見て、気付いたことを書き込みましょう



※守っていただきたいこと

展示物の真正面にいる時には書き込まないでください。

博物館の通路の真ん中に立ち止まって書き込まないでください。